

文部科学大臣 萩生田光一 様

文化庁長官 宮田亮平 様

この度のあいちトリエンナーレにおける補助金不交付の撤回を強く求めます。

はぎうだ光一 様

私が生活し、貴殿のご出身の地である東京都八王子市は、多摩美術大学や東京造形大学の学生たち、その卒業生をはじめ、現在、国内外で活躍する数多くの芸術家がアトリエを構え、創造力を研鑽してきた歴史を持つ、国内でも有数の芸術家の街です。

八王子に生きる芸術家の一人として、また美術教育に関わる教育者として、この国の文化芸術の未来を萎縮させ、暗い影を落とす可能性のあるこの度の決定が、八王子市ご出身の貴殿の名の下に行われる由々しき事態に、強く抗議します。文化芸術の、そして国家の持続可能な想像力とは、自らの加害の歴史を恐れることなく、真摯に向き合い、国際社会と粘り強く対話を重ねる、絶え間ない努力から生まれるのではないのでしょうか。

宮田亮平 先生

はじめまして、私は先生が東京芸術大学で美術学部長をされていた時代に油画科の一学生でした。卒業後の生活はなかなか大変ですが、現在もなんとか作品を作り続けています。

私は学生時代より、訪れてきた末広町で、池袋で、北千住で、先生の作品を拝見してきました。上野の西郷隆盛像や皇居前の楠木正成像などの岡崎雪声の関わった公共彫刻の系譜を継承されつつも、その重々しい国策との絡み合いから軽やかに逸脱する先生の作品は、戦後日本の公共の在り方に対する新しい提案を、眼に見える運動として我々に問いかけてくれる力を持ち得ていると、私は確信しています。

それは先生の「シュプリングエン」のシリーズが、国境を超えて回遊するイルカたちに芸術家であるご自身の姿を、そして世界中を行き交う芸術家たちの姿を重ねられ、鍛金と

いう長い歴史を持つ技術によって丹念に練り上げられ、抽象化された形態を留めていることと無関係であるはずがありません。そのような視点から先生が語られてきた日韓関係についてのご発言に、私は勝手ながら誇りを感じておりました。

ですが、そのような先生の作品の本質とは大きく矛盾する、この度の文化庁の決定に大変困惑しています。現在、日本国中に、そして世界の様々な公共の場に掲げられている先生の作品に、私たち表現者の想像力を萎縮させる象徴という呪われた文脈が加えられ「シュプリングェン」がドイツ語であることに不穏な響きが与えられてしまう未来など、想像したくありません。

我々の母校の名称にはすこし古くさい「芸術」の二文字が入っています。その言葉は西周が古代ギリシャ時代から綿々と続く、自由の為の諸技術、リベラル・アーツを翻訳したものであることは広く知られています。日本の公共彫刻の歴史の中で、なんだかすこしユーモラスに浮いていて、それが公共の場におかれることによってその本質が発揮されるが故に、多くの誤解も生んできた先生の作品は、むしろ正しく、この系譜にあると僕は感じてきました。

宮田先生。長い間、問われ続けてきた問いが、今、再び我々の手元にあります。公的な予算によって制作される芸術作品はその出資者の思想を反映するプロパガンダにすぎないのでしょうか？その時、芸術家はどのように振る舞うべきなのでしょう？フィレンツェの芸術家たちは？狩野派は？あるいはゴッホは？どう生きたのでしょうか？かつての上野の地で、作戦記録画の前で来場者に頭を垂れ続けた我々の先輩の藤田嗣治はどうなのでしょう？

ぼくはまだ今回の文化庁の決定に関する先生のお考えを伺っていません。それには、何か事情があるかもしれませんが、その不穏な沈黙が答えなのでしょう。

芸術家として、先生の英断を信じ、注目しています。

佐々木健

2019年10月6日